shaigaku

ひろば

2022年 No.4

特集 社医学学生のリアル

Contents

特集 社医学学生のリアル 3p
最終学年、社医学を語る!
データで見る社医学学生
輝く社医学卒業生 7p
スポーツと理学療法士 10p
教員紹介 12p
クラスメートの横顔 14p

学校法人 日本リハビリテーション学舎
専門学校 社会医学技術学院

自己実現を促す教育機関を目指して

専門学校 社会医学技術学院　理学療法学科長　小島　肇

人生100年時代と呼ばれる今、「リカレント教育」や「リスキリング」が叫ばれている。リンダ・グラットンらはテクノロジーの進歩、グローバル化の進展、長寿化、社会の変化、エネルギー/環境問題の深刻化というトレンドのなか、マルチステージの人生設計の必要性を論じている。そこでの学びは、新たな職への転換を図ったり、今後求められる技術を学んだりと、しなやかに生きることを勧めている。

本校は来年、創立50周年を迎える。病いや障害に苦しむ人々を支えてきた医療者のために開学したリカレント教育機関である。その社医学に奉職して8年目になる。教育についてさしたるトレーニングを受けたわけでもなく、わが子の教育の歩みと前職での卒前/卒後教育の経験程度で甚だご迷惑をおかけしている。入職後、いわゆる長期講習会や本校主催の教育講座で学ぶ機会を頂いた。また、大学FD研修や医学教育セミナー、さらには放送大学での科目履修などで学んできた。この間に相応した「リカレント」ができているのであろうか、甚だ疑問である。

医療系専門学校の置かれている状況は非常に厳しい。全国には19万人の学生が学んでおり、医療現場を支える人材として期待されている。しかし、機械に代替されにくい職の一つといわれるが、少子化や養成機関の大学化によって年々応募者は減少している。われわれのミッションは社会が希求する医療者を養成し、ディプロマポリシーに沿った人材を輩出することである。医療者養成という職業教育についていける学力を補いつつ、大学に相応する質の高い教育を担保することが求められている。そしてライセンス取得によって経済的基盤を保障しながら、一生を通した自己実現を促す教育機関となることを目指していきたい。

今年は寅年。子年や丑年に種の中で育った草木が根や茎として成長する時期といわれる。今まで培ってきた本校の教育の成長を見守り、来年の卯年での飛躍につなげる一年にしたいと考えている。

表紙の皆さん

新型コロナウイルスの影響で、例年よりクラスメートと顔を合わせる時間が少なくなった学生たち。安心して学び生活できる環境が一日も早く戻ることを願っています。（写真左から理学療法学科昼間部　田村叶さん、齋藤大輝さん、小西景子さん、千葉秀斗さん）

特集 社医学学生のリアル

理学療法士、作業療法士を目指して入学し、目標に向かって仲間とともに学校生活を送る社医学学生。どんな日常を送っているのか、卒業間近の最終学年による座談会と学生アンケートをお届けします！

座談会 最終学年、社医学を語る！

司会進行・理学療法学科 教員 **中山雅和**（写真右）

――まず、数ある学校の中から社医学を選んだ理由を教えてください。

吉川 昼間部の学校に入りたくて、３年制の社医学と４年制の他校を見学しました。３年制の社医学を選んだのは、他分野ですが２年制の専門学校へ進む友達が高校では多かったからです。３年制は４年制より大変かもしれないけれど、２年制に比べれば４年制は非常に長く感じます。３年制ならがんばれば乗り越えられると思って…。でも、想像以上にスケジュールはびっしりで、２年生になったらノンストップで進んでいる感じがしました（笑）。

佐藤 僕は大学進学も一瞬考えましたが、一般教養科目が今の自分には不要と思い、高校の先輩が多く通っている社医学を選びました。学科も昼間部志望だったのを夜間部の方が合っていると思い直し変更しました。高校の担任や友人、親も突然の進路変更で驚いていたようです。

夜間部のクラスメートは年齢層が幅広く、いろいろな経験を積んだ人たちがいろいろな思いで学んでいるのですごく勉強になります。

中村 生活ありきで昼間働ける夜間部のある学校を探していました。自宅から近い学校があったので見学もしましたが、社医学の方が歴史は長く、働きながら学ぶことのノウハウが豊富だろうと思って入学しました。１８時からの授業に間に合うために朝早くから働いたりもしましたが、おかげさまで仕事は３年次の１２月末まで続けられました。

――入学前のイメージとちょっと違った、自分が描いていた理学療法士・作業療法士像が変わったということはありますか。

吉川 小さいときから運動が好きで、高校時代はゴルフや陸上競技をやっていました。スポーツ分野に関わる仕事がしたかったので、スポーツに特化したクリニックへの就職を考えていました。２年生になって病院での実習を経験するうちに方向性が変わり、病院で働きたいと思うようになりました。毎日患者さんの変化を見ることができるのと、手術後のリハビリに興味を持ったからです。

佐藤 祖父がパーキンソン病で歩行に苦労していました。でも、リハビリが嫌いで日常生活が不自由になり、結局は施設に入ってしまいました。祖父のようなリハビリが苦手な人に早くアプローチするにはどうすればよいか、それを考えたくて理学療法士を目指しました。患者さんに早く関わりたいから急性期医療の現場で働く夢は入学前も今も変わりありません。ただ、患者さんにリハビリをしてもらうには、セラピストとしての人間性が大きく影響していることを学びながら知りました。

中村 私の場合は息子が発達障害で、療育（社会的に自立できるようにするために行う治療・教育）を月１回受けています。自分でも何かできないか、療育場面で使われている作業療法の知識を身につけられないかと思ったのが作業療法士を目指したきっかけです。

作業療法には「発達障害」「身体障害」「精神障害」「高齢期」の４領域に分かれていますが、どの分野を軸に働きたいというのは特にありませんでした。

イメージが異なったのは勉強面です。こんなに大変だとは思いませんでした。自習は必須で、二度と学生はやりたくない（笑）。先生方についてもイメージと違って、こんなに親身になって教えてもらえるとは、入学前には想像していませんでした。

佐藤 高校の先輩たちがスムーズに進級していたので授業については心配していなかったのですが、試験が難しくてびっくりしました。クラスメートと出題の

理学療法学科 夜間部４年 **佐藤大輝さん**（高校新卒）

理学療法学科 昼間部３年 **吉川映里奈さん**（高校新卒）

予測をしたり、先生に対策を教えてもらったりして乗り切りましたが…。

先生は聞きにいけばいろいろ教えてくれます。でも、自分から聞きに行くのが苦手な学生や楽観視している学生もいるので、そのあたりをくみ取っていただければと思います。

――社会人の多い夜間部は学生の自主性に任せているのが特徴でもありますが、われわれが自主性を育てていくことも必要ですね。学校以外の学び、実習についての感想を聞かせてください。

吉川 実習では患者さんにあわせて臨機応変に対応しなければならず、これは授業で学ぶことはできないことを実感しました。難しかったけれど、得ることが非常に多かったです。

中村 患者さんとのコミュニケーションの取り方が勉強になりました。身体障害領域での実習では患者さんと自分の親が重なることもあって、いろいろ加味したうえで身体障害領域の病院に就職を決めました。

佐藤 インターン実習は自分の希望通り、急性期病院で行いました。社医学の先輩も多い施設です。その前の評価実習で回復期の病院に行きましたが、今の自分に合っているのはスピード感のある急性期だと思いました。急性期医療の現場で多くの技術を身につけて、将来的には回復期や慢性期にも対応できるようになりたいです。

――自分に合った就職先を、実習を通して発見したり再確認したりという感じですね。３年あるいは４年の学校生活の中で、印象に残っていることは何ですか。

吉川 社医学では学生主体の活動としてふくろう祭（学園祭）やサークルなどがあり、自治委員会が取りまとめています。２年生のとき、自治委員会委員長を務めました。誰も名乗り上げないので「じゃあ、やるか」といった軽い気持ちで引き受けました。

実際に取り組んでみると、予算を立ててその承認を得たり、在校生から自治会費を徴収したりと、授業以外に学校で毎年誰かがこういうことをしていたのか、と驚くことが多かったです。でもコロナ禍だったので自治会活動は全部メールでのやり取りになり、行事やサークル活動も行えなかったのは残念でした。

行事がなかったのでクラス皆で何かをやることもできませんでしたが、その分、話し合う機会が増えました。クラス内は勉強に対する意欲が旺盛で「私もやらなきゃ」と、多くの刺激を受けました。それもよい思い出ですね。

中村 コロナ前に実施したふくろう祭で作業療法学科ブースの責任者を任されました。人員配置に苦労しましたが、みんながよく動いてくれたので大成功だったと思います。クラス内の結束が非常に強いからかもしれません。

若いクラスメートのノリについていけないときも多々ありますが、そのエネルギーをよい方向に向けていくのが年長者の役割だと思っています。彼らの中でトラブルがあったとき、われわれ年長者が叱ったりすることもあります。クラス内で解決するのが、結束力の原動です。

佐藤 すごく印象に残っている出来事があります。試験のとき優秀な人は序盤に退出するのに、ある試験では誰もが時間いっぱいまで席を立たずに取り組んでいたんです。その初めての光景に感動しました（笑）。みんな分からないんだなって思うと嬉しくなってしまって…。

作業療法学科 夜間部４年 **中村千尋さん**（社会人）

僕はクラスの中では一番年下になりますが、年上の方たちとのやりづらさは全く感じませんでした。４年間通して助けてもらうばかり。皆さん優しく接してくださる分、こっちこそがんばらないと思わせられる、そんな関係性がありました。

――その試験は、クラスの連帯感を生んだきっかけになったでしょう（笑）。社医学を後輩や知り合いに紹介するならどんな点を勧めますか。

吉川　３年間で卒業したいと思っているなら社医学昼間部はおススメです。３年で乗り切る秘訣は、自分で選んだ道をやり遂げたいという思い…でしょうか。

中村　社医学の作業療法学科は１学年１クラスのみ。横のつながりがしっかりもてます。小さいゆえのよさといえるかもしれません。

佐藤　学生時代にゆっくりしたい人は大学のほうが向いているかもしれません。でも、社医学なら理学療法士作業療法士の養成校として学費は他校より安いし、先輩も多い。就職先に困ることはないと思います。

――いろいろな話を聞くことができて勉強になりました。ありがとうございました。

収録日　２０２１年１２月２０日

最終学年に聞きました！

shaigaku アンケート

Q1、Q2は回答のトップ３とコメント、
Q3についてはさまざまなご意見をいただきました。

Q1 学校生活で印象に残っていることは何ですか。

① **勉強**
「切磋琢磨して勉強をみんなで行ったこと」

② **友人関係**
「幅広い年齢層の友人との交流」

③ **臨床実習**
「学院での学びを、臨床実習を通して再確認できた」

Q2 社医学の魅力・良いところは何でしょうか。

① **学生間の交流**
「学生同士の仲がいい」

② **教員とのコミュニケーション**
「先生とコミュニケーションが取りやすく、優しく相談に乗ってくれた」

③ **卒業生の多さ**
「就職先や実習地が充実している」

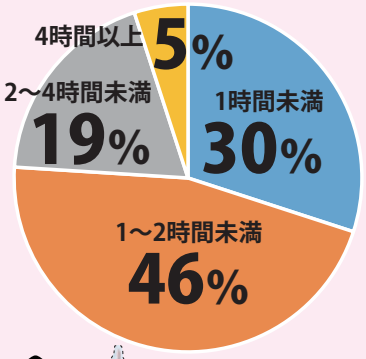
Q3 社医学をもっと魅力的にするにはどうしたらよいですか。

「コロナ禍ではあるが他学年との交流機会が欲しい」
「先輩方が築いてきた歴史を前面に出したほうが良い」
「活躍している先輩の働き方をもっと知りたい」
「文化祭などの開催をもっとアピールし、地域との連携が図れるともっと良いのでは」

※調査方法：最終学年を対象に2021年9月、WEBアンケートを実施（回答率20%）

データで見る 社医学学生ライフスタイル

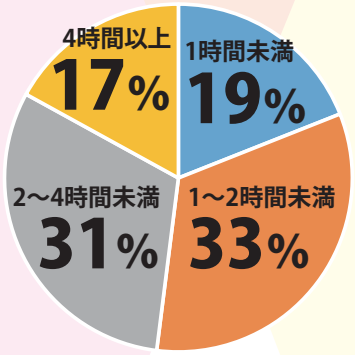
Q 平日の勉強時間は？



A

最も多いのが「1〜2時間」。「1時間未満」と合わせると全体の約8割を占めていました。理学療法学科夜間部の学生に多い傾向です。

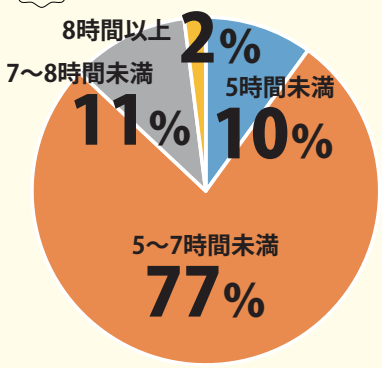
Q 休日の勉強時間は？



A

平日より勉強時間が増え、「4時間以上」と答えた人が12ポイント増えました。その多くが理学療法学科夜間部の学生でした。

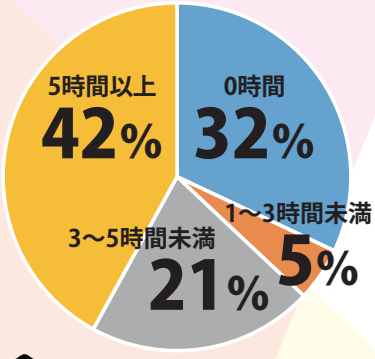
Q 睡眠時間はどのくらい？



A

最も多かったのが「5〜7時間未満」。1割の学生が「5時間未満」と答えていました。

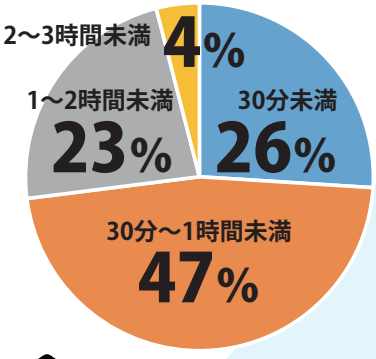
Q アルバイト時間（平日）は？



A

最も多い回答が「5時間以上」、次に多いのが「0時間（アルバイトはしていない）」。前者は夜間部、後者は昼間部の学生に多く見られました。

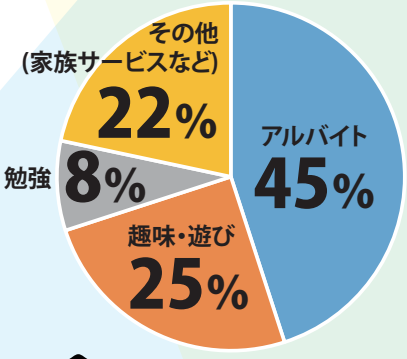
Q 通学時間は？



A

「30分〜1時間未満」と「30分未満」で7割を占めました。「2〜3時間未満」かけて通学している学生もいます。

Q 学院外では何をしている？



A

最も多かったのが「アルバイト」。「家族サービス」「家事と運動と勉強」という回答もあり、年齢層が幅広い社医学ならではの！

※調査方法：全学生を対象に2021年9月、WEBアンケートを実施（回答率30%）。

輝く社医学卒業生

社会人として輝く先輩たちに、学生時代や仕事について伺いました。

エンタメの世界で活躍を
―宝塚時代の経験を
セラピストとして生かす―

医療法人社団山手クリニック
理学療法士
堂園　森恵さん
理学療法学科夜間部2017年卒業

ミュージカルや芝居が好きで宝塚音楽学校に入学し、13年間宝塚歌劇団で過ごしました。理学療法士という職業を知ったのは、在団中に膝の軟骨が欠けるけがをして入院したときです。痛くて体が動かせず休演することになり、非常につらい思いをしました。その一方、リハビリのおかげで前よりも強い体になり精神的ダメージも回復。リハビリの重要性を実感しました。先輩、後輩など、パフォーマーがけがで悩んでいるときにエンターテインメントの世界に精通した理学療法士がいればどんなに心強いか。けがというマイナスの経験を次の人生では理学療法士としてプラスにしようと考えました。

宝塚を退団した翌年に社医学の夜間部へ入学。社医学を選んだのは、どの養成校にいけばよいのかと誰に聞いても答えは「社医学」だったから。すれ違う生徒の皆さんが「こんにちは」ときちんと挨拶してくれたことも決め手になりました。夜間部に入ったのは、日中は現役時代からお世話になっていた整骨院で経験を積みたかったからです。

クラスメートは介助犬の訓練士や社会人ソフトボール選手、楽器の修理を生業にしていた人など、私と同じくセカンドキャリアとして目指す仲間が多く、みんなで助け合い、切磋琢磨しながら4年間、走り続けました。仲間とたびたび勉強会を開き、先生方に協力してもらいながら教わったことを深堀したり、授業以外のことを学んだりしたことは、学校生活の一番の思い出です。

現在勤務している整形外科クリニックでは、一般の患者さんだけでなく、バレエダンサー、役者さんのリハビリを担当することもあります。理学療法士になった目的に沿った仕事に携われ、やりがいを感じます。今後はエンターテインメントの世界で理学療法士が活躍できる、そんな仕組みをつくるのが目標です。

社医学の皆さんには、3年間あるいは4年間、吸収できることをできるだけ吸収してほしい。もがき苦しみながらも、必ず実になり現場で役立ちます。理学療法士は患者さんに寄り添って一緒に頑張る伴走者だと思っています。同じ景色を見られる仲間が社医学から増えてくるのは嬉しいですね。

女性の体を支えて
－ウィメンズヘルスの大事さ－

医療法人社団 大和会 多摩川病院
理学療法士
藤井　信濃さん
理学療法学科昼間部2014年卒業

中学3年生の時、祖母がクモ膜下出血で入院しました。最初は歩くのも大変だったのがリハビリを経て元気になり、その時に理学療法士という職業を知りました。進路を考える時期に祖母のリハビリを思い返し、「人の役に立つ仕事がしたい」という気持ちから理学療法士を目指しました。

当時、姉が社医学に在籍していました。姉が生き生きと学校生活を送っている様子を見ていたので、社医学への進学を自然に選択。クラスメートや先生に恵まれ、楽しい学生生活でした。社医学時代の友達とは、本当に仲が良くて、今でも連絡を取り合っています。

卒業後は多摩川病院で働いています。勤務して8年目、現在は排泄リハビリに力を入れています。出産、加齢などで骨盤底筋が弱まってしまうと尿漏れが起きやすくなります。そのような患者さんに超音波エコーで骨盤底筋の収縮を確認しながら筋力トレーニングを行うのが排泄リハビリです。院内アンケートで100名に回答していただいたところ、全年齢層の女性の3人に1人は尿漏れの経験があるという結果が出ました。また、メインは高齢者ですが、20代など若年層でも尿漏れの経験があることが分かりました。

院外活動としては、ウィメンズヘルスに興味を持って取り組んでいます。思春期から老年期までのライフスステージの中で、女性の体にはさまざまな問題が起きます。月経前症候群や、思春期の摂食障害、産前産後の骨盤周囲の痛みや、産後うつ、更年期障害、尿漏れ、骨盤臓器脱や骨粗鬆症などです。

病院で働く中で女性ならではの問題を抱えた方とたくさん出会い、理学療法士として関われる部分がまだまだあるなと感じています。

私が多摩川病院で関わっている方は、基本的には整形外科の疾患や、脳血管疾患の方がほとんどですが、ADL（日常生活動作）やQOL（生活の質）の向上という部分を広い視点で見た時に、女性ならではの体の問題にも向き合っていかなければいけないと思いながらリハビリをしています。もっとウィメンズヘルスの認知度が上がるように、リハビリの必要性があると訴えるために、微力ですが研究発表もしています。

社医学在学中は「こんなに難しい勉強をずっと続けていけるのかな」「私、本当に理学療法士になれるのかな、なってからも続くのかな」と思うことが多々ありました。学生の皆さんにとっても、勉強が大変に感じられる時があるかもしれません。ですが、理学療法士はいろいろな分野で活躍できる仕事です。何か一つでも「これ、楽しいかも」と思えることが見つかって、それを続けていけば、楽しく仕事をしていけることを自身の経験を通して実感しています。

「何でもやってみよう」という姿勢で

―遊びを通して子どもと保護者を支援―

発達・教育支援センター「エール」
作業療法士

今井　恵子さん

作業療法学科夜間部2014年卒業

もともと保育士をしていました。理学療法士や作業療法士の存在を知ったのは、障害児の通園施設で保育士として働いていた時です。両職種から教わりながら療育を行ったり、研修に参加したりする中で、障害児への支援についてもっと学びたいと思うようになりました。子どものおもちゃを手作りすることが好きだったのと保育士の経験が生かせると考え、作業療法士を志しました。

社医学を選んだのは、学費が安く、また夜学なのでさまざまな経験をしてきた人が集まっているだろうと思ったからです。実際、幅広い世代の人と友達になれて、大人になってからの学生生活は楽しいものでした。勉強は大変でしたが、一緒に頑張る仲間がいたから乗り越えられたと思います。クラスメートとは、今でも仲良くしています。

現在は、東京都日野市の発達・教育支援センター「エール」で、作業療法士として勤務。就学前の子どもを担当しています。感覚統合室という遊具いっぱいの部屋で、その子に合わせた遊びを提供したり、保護者の方へ遊びの提案をしたりします。

子どもは日々様子が違います。加えて大人がやってほしいことと子どもがやりたいことがマッチしないことも多いです。そのため、その子にあった教材はあらかじめ準備しておきますが、あえて細かい計画は立てず、やりとりをしながら、その日行うことを具体的に決めていきます。子どもと向き合いながら「今日はこれをしよう」と考え、遊びを展開していく過程が面白いです。子どもが「やってみたい」と思った遊具で、その子に必要な要素を加えてみたりもします。体を動かすことが子どもの運動面も知的な面も育んでいると思います。

感覚統合室では「これはダメ」ということは極力しません。目指しているのは「何でもやってみよう」という姿勢で、子どもに成功体験を経験させること。ここでの遊びがきっかけで保育園や幼稚園で出来ることが増えたり、何かをやりたいと思うようになったりと、少しずつですが変化が見られます。保護者の方も「この子はこういうタイプなんだ」と理解することによって、子どもとの関わり方が変わることがあるようです。

子どもは発想が豊かで面白いことをいろいろ考えてくれます。一緒に遊ぶのは頭も体力も使いますが、エネルギーをもらっていることも多いです。子どもに向き合うのはもちろん、保護者の方には子育てで困っていることや悩みを聞いて「その子の良いところを見つけてどう伸ばしていくか」といったアドバイスもします。子どもを支援すると共に、保健師や心理士、言語聴覚士など他職種の人と連携して、保護者の方のサポートを広く行っています。

「エール」感覚統合室にて撮影

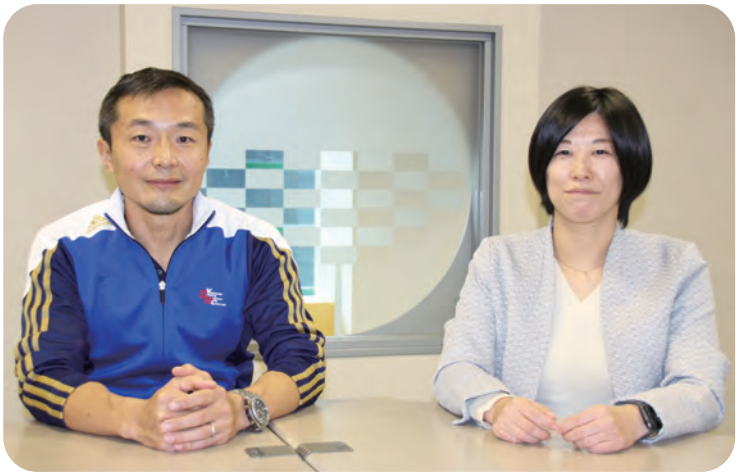
スポーツと理学療法士

横浜市スポーツ医科学センター
玉置　龍也さん

現場が求めるのは スポーツに関わる意欲と熱意

理学療法士の就職先の多くは医療福祉分野ですが、昨今ではスポーツ分野で働く方も増えています。その一人、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会で活躍された本校卒業生の玉置龍也さんにスポーツと理学療法士の関わり等を伺いました。

聞き手は車いすラグビー日本代表チームのトレーナーとして東京2020パラリンピック競技大会に参加した本校理学療法学科の藤川明代教員です。



ストレスなく治療・リハが受けられる環境づくりを提案

――理学療法士を目指したきっかけから教えてください。

玉置　小さい頃からスポーツが好きでいろいろなスポーツに取り組み、大学ではアメリカンフットボール部に所属していました。最終学年のときにけがが続き治療とリハビリを繰り返して、理学療法士でもあるアメフト部のトレーナーの方にたいへんお世話になりました。

その方にスポーツによるけがで困っている選手に医療分野でアプローチできないかと相談したところ、トレーナーの方の出身校である社医学を紹介されました。

勤務している横浜市スポーツ医科学センター（以下、センター）も同じ方からの紹介です。昼間はセンターで働き夜は社医学へ通い、卒業後そのまま就職しました。

――東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京2020大会）では、理学療法部門の副チーフとしてご活躍されました。

玉置　2017年に大会組織委員会へ入り、初年度は主に競技会場における医務室の計画や競技団体との調整を担当しました。翌年には理学療法士の募集を開始し、日本理学療法士協会からの推薦を中心に、競技団体で活動いただいた方も合わせて800名近くの理学療法士の方にご参加いただけました。大人数ですので、マネージャー、リーダー、セラピストとそれぞれ役割を明確にし、それぞれが判断しながらも風通しよく情報をやり取りしサポートしあえる形の組織をつくりました。自分と同じ思い、熱意を持った人にリーダーになってもらったので、コミュニケーションが非常に取りやすい組織になったと思います。

――理学療法士以外の職種も参画していましたね。

玉置　国際競技大会では理学療法士だけでなく、その他の分野の専門家とも連携して各国選手の要望に応えます。東京2020大会においても「Physiotherapy and Physical Therapies Services」と表記する、総合的な理学療法サービスを提供し、理学療法士に加えてあん摩マッサージ指圧師や、はり師の方にも参加いただきました。総合的な理学療法サービスとは、選手のパフォーマンスにプラスにつながる、徒手的あるいは機器による介入のすべてを指しています。さまざまな職種との円滑な連携が不可欠ですので、大会期間中は選手村の総合診療所でその調整に努めていました。フィットネスセンターで活動するアスレティックトレーナーとの施設をまたいだ連携もありました。

スポーツ領域で活躍する卒業生

所属先は2021年12月時点

社医学には国立スポーツ科学センタースポーツメディカルセンターの高橋佐江子氏をはじめ、多くの卒業生がスポーツ現場で活躍しています。直近では大宜見 諒氏/株式会社横浜DeNAベイスターズ、松本 圭介氏/株式会社大分フットボールクラブ大分トリニータ、斎藤 淳基氏/楽天ヴィッセル神戸株式会社ヴィッセル神戸U-18トレーナー、阿達 大地郎氏/國學院大学ラグビーフットボール部トレーナー等々。理学療法士とスポーツの関わりはますます広がることでしょう。

横浜市スポーツ医科学センターで働く社医学生に
①好きなスポーツ、②将来像を聞きました！

石塚智陽さん（写真左・理学療法学科夜間部）
①野球 ②謙虚さを忘れずに、「生涯勉強」をしていく理学療法士

筒井俊春さん（写真右から2番目・卒業生）
①野球 ②社医学の先生

石井千里さん（写真右・理学療法学科夜間部）
①ラグビー、陸上競技 ②スポーツチームでトレーナーとして活動しつつ、病院で理学療法士として勤務し、スポーツ現場と医療機関の中継役となる事が目標です。

――海外選手の対応をしていると、いろいろな面で日本との違いを実感します。

玉置 日本では、理学療法は医師の処方をもとに行われますが、諸外国では理学療法士から直接治療が受けられます。東京2020大会では日本の医療法が適用されるので医師の診察から始まりますが、診察室を出てから理学療法室へ向かうのをストレスに感じる選手も少なくないと考えました。そこで、理学療法室に医師が常駐するスペースをつくり、スムーズに治療が受けられようにしました。同じ部屋にいることで医師も理学療法士もお互い何をしているのかが分かり、連携も取りやすい。今後の診療に反映できればと思います。

選手へのサポートで得た効果を市民のスポーツ向上に役立てる

――勤務先のセンターには玉置さんに続けと、現在も社医学の卒業生や学生が働いています（囲み参照）。

玉置 それぞれ曜日ごとのシフトで勤務しており、理学療法士はスポーツ復帰までのリハビリをマネジメントし、学生はその助手を務めています。社医学に入る前からスポーツに関心がある人が多いですね。センターではスポーツによるけがの治療だけでなく、スポーツを通じた健康づくりのための事業や情報発信も行っていて、私もスポーツ診療以外にスポーツ科学の研究や健康増進のための事業に取り組んできました。

スポーツ現場にも足を運びます。センターが協定を結んでいるプロバスケットボールチーム「横浜ビー・コルセアーズ」のアスリートパフォーマンスディレクターとして、選手がシーズンを通じて高いパフォーマンスを発揮できるようコンディションを支えるために、メディカル＆コンディショニングチームをまとめてチームや選手のサポートを行っています。

――スポーツ現場には医療現場にはない魅力があります。

玉置 病院へ行くほどではないけれど症状に悩んでいる選手は少なくありません。選手は練習や試合を休みたくないですから、病院へ行くと言うのはよほどのことです。「足首がちょっと曲がりにくい」という訴えに、われわれが現場でほんの少しの手助けすることで不調が改善することは非常によくあります。また、こうした訴えはその後のケガを示唆する重要なサインであることもよくあり、それを見逃さないことも大切です。現場では選手とのやり取りから学ぶことが非常に多いですね。関わった選手がパフォーマンスをさらにアップして活躍してくれるとすごくうれしい。これは医療現場で患者さんが元気になられる姿を見るのと同じです。

選手へのサポートを通じて得られた効果を横浜市民など地域の皆さんのスポーツパフォーマンスの向上や健康増進に還元するのもわれわれセンターの仕事です。Webなどで情報を発信しています。

――スポーツ領域に関わりたいという学生へ、アドバイスをいただけますか

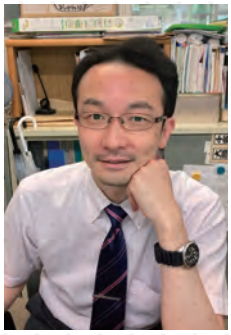
玉置 理学療法士は、解剖のことから運動のことまで、幅広い知識が必要な医療職です。それを突き詰めていけば最終的にはスポーツにつながってくるので、まずはきちんと勉強することですね。そして、興味のあるスポーツがあれば自分自身がやってもいいし、観戦でも、研究でもいいので、何かしらスポーツに関わっていることが大切です。そのうえで、スポーツに関わりたいと常に言い続けることが大事だとつくづく思います。どんな現場でも熱意を持っている人に来てほしいと思っています。そのアンテナにひっかかるように、言い続けてほしいですね。

プロフィール

玉置 龍也（たまき たつや／理学療法士）
2003年 東京大学卒業後、社会医学技術学院夜間部入学。
2007年 卒業後、横浜市スポーツ医科学センターに勤務する傍ら、2011年 横浜ビー・コルセアーズにメディカルトレーナーとして参画（2021年からアスリートパフォーマンスディレクター）。
2017年～2021年には東京2020大会組織委員会に選手村ポリクリニック理学療法部門副チーフとして活躍した。

“あたりまえの日常”という幸せ

理学療法学科　学科長補佐
小林　規彦



これまで私は、地域活動や食べ歩きなど外出機会の多い生活を送ってきました。しかし、突然襲ったコロナ禍。全ての機会は失われ、必然的に家で過ごす時間が増えたことで、家事全般を行うことが多くなりました。妻が訪問看護に従事しておりコロナ禍の影響が直撃、時間や休日も不定で多忙となったこともこれに拍車をかけました。子どもたちへの影響も大きく、学生生活で一生の思い出になるはずの多くの機会が失われ、登校すら制限される失意の日々。家族全員ストレスのたまる毎日です。

そこで日々の食事だけでも楽しんで食べることができるように、料理をする際はバランスの良い栄養摂取を考えることはもちろん、彩を添え見た目にも楽しく食事できるよう心掛けて作るようにしています（もちろんデザートは欠かさずに!?）。気づくと一緒に食卓を囲み会話する時間がこれまで以上に多くなり、家族一緒に健康で過ごせることの幸せを実感する毎日です。

コロナ禍という災難により、当たり前の日常を家族で過ごせる有り難さをあらためて感じることになるとは皮肉なものです。さまざまな要因により問題を抱え、この当たり前の日常に支障を来した対象者を支えていくのがリハビリテーションになります。この仕事に従事し、多くの学生を育てる責任とやりがいを痛感する毎日です。

教員紹介　思いつくまま　働く

心のゆとり

理学療法学科　学科長補佐
中山　雅和

新型コロナ禍での生活もあっという間に3年目に入り、昨年、一昨年よりは工夫していろいろなことが出来ています。特に、私の仕事以外の時間では一番大事な時間である「子どもと過ごす時間」にも、さまざまな変化があります。

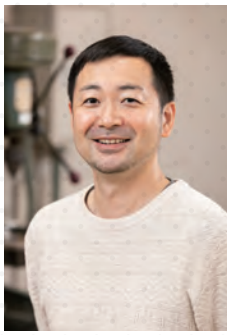
感染拡大が続く中では、せっかくの夏休みも一緒に外出する機会がなく、自宅を中心に過ごすことが増えていました。このままでは貴重な子ども時代の思い出が少なくなってしまうと思い、この夏は「自宅でアウトドア」を楽しむことにしました。

毎週末、庭にプールを出して、夜はホットプレートで庭BBQ。そして、テントで寝るという「非日常」を子どもたちはとても喜んでいました。

先が見えない状況の中ですが、それでもちょっとした工夫で楽しめることが世の中にはたくさんあると思います。そのように考えることが出来る心のゆとりを持つ大事さをあらためて感じています。

子どもの「成長」と私の「成長」

作業療法学科　学科長補佐
照井　林陽



私にはこの春で小学生になる子どもがいます。今日まで、子どもの成長の一進一退を通してその成長が親への鏡に感じる日々でした。子どもに気になる行動があった際に自分を振り返ると、「スキンシップが全然足りていない」「会話や食事場面、休日などの共有が乏しい」「褒めることを忘れがち」などなど、挙げたらきりがないくらい思い当たる原因がありました。まさに子どもは、その体と心と言葉と行動で、「お父さんはこうだよ！」と懸命に教えてくれているのでした。

そのことに気づくたび、親としての「成長」を誓い直し、巻き戻しのできない子育ての時間と向き合い直すことを幾度となく繰り返しています。つくづく、親としての「成長」と子どもの「成長」は密接だと思うのですが、この親としての「成長」や子育てから気づかされる学びは、ほとんどが教育や作業療法士としての引き出しに活かされています。

「長い目で見ること」「失敗経験と失敗体験は異なる」「その人生の主人公は誰か」「正解ばかりを求めない」など、たくさんの気づきを活かしながら、未熟な私なりに今後も父として、教員としての「成長」をしていきたいと思う社医学14回目の春です。

教員・遊ぶ・暮らす＋α介

乗馬をするということ

理学療法学科　教員
山本　千夏

私の趣味は乗馬なのですが、始めたきっかけは理学療法士ならでは!?の悩みからでした。当時、臨床業務で対応が難しい患者様を担当しており、良くしなければならないのに全くうまくいかないことが正直ストレスでした。そんな時、乗馬倶楽部での試乗で他にはない面白さと難しさを体験し、新しい事に挑戦してみたいと始めました。言葉が通じず、適切な指示がなければ縦横無尽に動き回る500kg の巨体を乗りこなすためには、運動神経うんぬんよりも馬に自分の合図が伝わることが重要で、この点に自分が臨床で抱えていた課題を解決する鍵があると思いました。

馬とのコミュニケーションツールは言葉ではなく、乗り手の接触や動き、位置取りなどです。合図が受け入れられなければ当然無視されて好き勝手に動きますし、気に入らないことをすれば暴れて振り落とされることもあります。楽しさは常にリスクと隣り合わせで、乗り手のしたことの良しあしは相手（馬）の反応に現れるため、常に相手のことを考えなければなりません。

はたから見ると乗馬は優雅に見えますが、そこには、人間関係と同じく、多くの対話とお互いを許容するための試行錯誤があるのです。私の臨床技術が向上したかどうかはまたの機会にお話しします。

クラスメートの横顔 - meet our classmates -

さまざまな年代や経歴を持つ学生が机を並べる当学院。
そんなクラスメートの横顔を紹介します。

アスレティックトレーナー資格を目指す林さん。さらに理学療法士を志す理由を聞きました。

理学療法学科夜間部
2019年度入学
林　廉人さん

――大学卒業後に社医学に進学した理由を教えてください。

「スポーツ選手のケアをしたい」という思いから大学生の時、アスレティックトレーナーの勉強をしていました。しかし、地元ではスポーツ関連の仕事が少ないので、働く選択肢を増やすために理学療法士とのダブルライセンスを取得することを決めました。

――林さんは日中、東京医科歯科大学で働いています。仕事を教えてください。

医師、歯科医師、理学療法士、アスレティックトレーナーといった職種が連携し、アスリートサポートと研究を行っているスポーツサイエンス機構という組織があります。私は事務補佐員として、診療実績の管理や、物品管理、現在スポーツ庁長官の室伏広治教授をはじめ、各先生方のさまざまな研究計測の補助等を行っています。

――アスレティックトレーナーと理学療法士の違いは何でしょうか。

アスレティックトレーナーの主な業務はスポーツ現場での応急処置や、メディカルレベルから競技復帰までのアスレティックリハビリテーションなどがあります。一方、理学療法士はメディカルレベルにおけるリハビリテーションが主な業務となります。

アスレティックトレーナーと理学療法士の2つの知識を習得することで、受傷から競技復帰に至る一連の回復過程を理解することができます。それによって、スポーツ選手だけでなく、スポーツを楽しむすべての人の力になれるのではないかと思います。

室伏広治教授と一緒に

――社医学に入ってから、考えに変化はありましたか。

社医学への進学を決めた時は、「理学療法士の資格を取得することで病院勤務ができるため就職には困らないだろう」とか、「アスレティックトレーナーとのダブルライセンスを保有することで、プロチームのトレーナーの条件を満たすことができるだろう」くらいに考えていました。

それから3年たち、「やれることがこんなにある」「2つの資格を持っているからこそできることがある」ことがはっきりと見えてきました。

アスレティックトレーナーの活躍の場は理学療法士のそれと比べると狭いように思います。広げるためには、国家資格にすることも方法の一つではないかということを、東京医科歯科大学で働きながら実感するようになりました。

――スポーツに対する林さんの考えを聞かせてください。

昨年東京五輪が開催され、スポーツの魅力を多くの方が改めて認識されたことと思います。そのため、正しくスポーツ指導ができる人材や、子どもや学生が安全にスポーツを楽しめる環境をもっと整備していく必要があると感じています。

スポーツによって体を動かす楽しさや気持ち良さ、自分のコンディションを知ることができれば、健康寿命の延伸にも貢献できるのではないか。スポーツをする人、したい人をさまざまな形で支えるための努力を続けていきたいです。

義肢装具士の資格を持つ村上さん。作業療法士を目指すきっかけを話してもらいました。

作業療法学科夜間部
2020年度入学
村上　崇さん

――義肢装具士になったきっかけをお聞かせください。

両親が勤めていたリハビリテーションセンターに義肢装具士の方が一緒に働いていたせいか、仕事についてある程度聞いていました。かいつまんで言えば医師の指導のもとに、義手や義足、コルセットなどの装具の製作と身体への適合を行います。

もともと家庭科や美術科などのものづくり好きな自分にぴったりな職業だと思い、大学卒業後に養成校へ通いました。授業で製作技術や医学的知識を学ぶだけでなく、病院で型取りを行ったり、義肢装具製作所で実際につくってみたりといった臨床実習も経験しました。

――義肢装具士の仕事について教えてください。

義肢装具士の働く場所は、病院やリハビリテーションセンターなどありますが、多くは義肢装具製作所に就職します。私も2年間、製作所で働きました。

毎週決まった日時に病院へ行き、医師から義肢や装具のオーダーをもらいます。患者さんの採寸や型取りを行い、製作所に持ち帰って作製し、出来上がったら病院で患者さんに装着してもらい、患者さんの身体に合うよう調整する、それが仕事の流れになります。

同じ装具でも患者さんによって使い方が違ったりするので、一人一人に合わせてつくることが何より面白かったです。何度も調整したあとに完成したときは達成感がありました。患者さんから喜んでもらえたり、感謝されたりするので、非常にやりがいもあります。

そのうち、つくったものに対するフィードバックがもっとほしくなりました。やりがいになるだけでなく、技術も向上するからです。しかし、患者さんに実際会うのは週1回程度。もっと患者さんと関わりたいと思いました。

村上さん製作の義肢

――義肢装具士と接点が多い理学療法士ではなく、作業療法士を目指したのはなぜですか。

確かに理学療法士の方々とは義肢装具を調整するときに連携を取ったりするので、働く場面では作業療法士に比べて関わりは多かったですね。

ただ、義肢装具士の仕事内容は、どちらかといえば作業療法士の方が近いように思います。義肢、装具と同様に、作業療法で用いる自助具もその人に合わせてつくったり調整したりということが必要だからです。

作業療法士はその人の人生そのものに関わり、先を見据えた支援を行う点に魅力を感じました。どう支援できるかを、他職種とともに考えていくのも興味深いです。

――現在の学生生活はいかがですか。

日中は整形外科のリハスタッフとして週3回アルバイトをしているので、バイトがないときに勉強しています。覚えることが多くて大変といえば大変です。けれど、身体のメカニズムや治療アプローチを詳しく知ることができるなど、新たな知識がどんどん増えていくので楽しいです。先生方の経験値が豊富で、臨床に裏付けされた話が自然に聞けるのもうれしいですね。

shaigaku

広報誌「社医学ひろば」 2022年 No.4
発　行　学校法人 日本リハビリテーション学舎
東京都小金井市中町2丁目22番32号
TEL 042-384-1030
FAX 042-385-0118
発行人　宮武　剛
発行日　2022年4月